

人間環境学部

I 2018年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2018年度大学評価結果総評】(参考)

人間環境学部は、「持続可能な社会」の構築に貢献する文系の人材を輩出するという学部の目指すべき明確な方向性を打ち出した上で理念・目的を設定されている。また学部長期構想で具体的な方向性も設定されている。これは法政大学の3つのミッションの一つ「激動する21世紀の多様な課題を解決し、『持続可能な地球社会の構築』に貢献する」とも合致しており、学部の発展が大いに期待される場所である。

教育課程については、学位授与方針に従って学生の育成に必要な教育課程が適切に編成されており、カリキュラムの充実化に向けて学部教授会や各種委員会において検証・検討作業が継続的に行われており、PDCAサイクルが適正に運用されていると評価できる。

学生の受け入れについては、定員の超過・未充足に対し適宜対策がとられ、適切に対応している。学生募集や入学者選抜の結果について検証が行われ、長期的な戦略策定や広報戦略に反映する取り組みが行われている。

学生支援については、「基礎演習」での担任制、理系分野のリメディアル科目として「サイエンスカフェ」の設置、全教員がオフィスアワー、社会人学生支援担当(教員2名)を設置など学部として学生の修学支援の取り組みが行われている。今後文理融合であり特定の分野の枠に収まらない学部教育を掲げる学部として、望ましい学習課程や学習スタイルをより深く追究され整備されることが期待される。

【2018年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】

人間環境学部のメインテーマは、学部の英語名称“Faculty of Sustainability Studies”に明確に表されており、評価の通り大学の3つのミッションの一つ『持続可能な地球社会の構築』を先導すべき使命を帯びているといえる。このことは、昨年度に学部HPに公表された長期構想「人間環境学部2030」(2017年3月)策定時の理念・目的の再確認とともに、改めて所属教員に認識されている。

2010年代に、理念・目的に沿った教育内容の充実を期して、積極的にカリキュラム改革や新規事業を手がけ、2030年までの長期構想も策定した本学部の昨年度は、それら新たな取り組み(英語学位コース“SCOPE”その他)の安定化や、2019年度からスタートする事業(社会人“RSP”=リフレッシュステージプログラム)の準備に注力した。ただ、PDCAサイクルを省みると、数多くの新たな取り組みが、執行部や学部事務局に過負担を招いている面もあることが課題として浮かび上がってきたため、その改善(組織的な業務分担のあり方の改善)をめざす方策を考えており、今年度から試行する。

学生の受け入れについて、2019年の一般入試は志願者数が2500名超と、ここ15年間では最高を記録しており、順調といえるが、SCOPE生や社会人RSP生などの少人数枠も重視しており、多様な経路により多様な学生を集めるというアドミッションポリシーに基づいて、各経路の定員を確保する広報戦略を立てている。

多様性ゆたかな学生の修学支援は、一律に行かないため労力を要するが、大学の学習環境支援センターやグローバル教育センターの提供するサポートシステムなども利活用しつつ、数がマイナーな学生たち(SCOPE生・留学生や社会人RSP学生など)も大切にし、様々な経路の「コミュニティ」同士の交流が、大学のダイバーシティ宣言にも適う学部の特長を伸ばすメリットになると考えて、取り組んでいく。

学部は昨年、創立20周年を迎え、外部講師を招いた20周年記念シンポジウムを開催した。「社会貢献・社会連携」は、学部のカリキュラムポリシーの柱である学際性と一体の特色である。教育内容(フィールドスタディ、人間環境セミナー、キャリアチャレンジ等)はもちろん、様々なコミュニティ(教職員・在学生・OBOG・外部団体等)の交流・情報交換のプラットフォームを期したwebサイト「人間環境倶楽部」に象徴される社会連携・貢献活動を通して、教育・研究・社会貢献の3つの有機的なFD活動を進め、大学の「開かれた法政21」の方針に寄与することをめざす。

【2018年度大学評価委員会の評価結果への対応状況の評価】

人間環境学部は、2018年度大学評価総評において、PDCAサイクルの適正な運用について評価されているが、執行部や学部事務の過負担を招く側面もあるとされている。2019年度からは改善方策の試行を進めるとのことであり、今後の経過を見守りたい。また、学生の受け入れについても定員の未充足に対し適宜対策が取られ、適切に対応していること、学生募集や入学者選抜の結果について検証が行われ、長期的な戦略策定や広報戦略に反映する取り組みが行われていることは評価できる。

2030年までの長期構想を策定し、理念・目的に沿った教育内容の充実、積極的なカリキュラム改革や新規事業、特に英語学位プログラム(SCOPE)、フィールドスタディの海外コースなどグローバル教育の体系化を推し進めていること、2019

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

年度から開設する社会人学生用「RSP（リフレッシュステージプログラム）」の準備など新たな取り組みにも着手しており高く評価できる。

II 自己点検・評価

1 教育課程・学習成果

【2019年5月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

1.1 教育課程の編成・実施方針に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	
①学生の能力育成のため、教育課程の編成・実施方針に基づいた教育課程・教育内容が適切に提供されていますか。	S A B
<p>※教育課程の編成・実施方針との整合性の観点から、学生に提供されている教育課程・教育内容の概要を記入。</p> <p>学部の専門科目を、カリキュラムポリシーに基づいて体系立て、段階的な能力育成が可能な環境を整えている。「学際性」のコンセプトは、特に5つのコース制に反映されている。</p> <p>また、「学際性」と一体の「社会との交流・連携」のコンセプトを代表する看板科目「フィールドスタディ」と「人間環境セミナー」に加えて、2017年度にPBLをより深く実践的に経験する場として、受け入れ団体との提携に基づく「キャリアチャレンジ」を開講した。このキャリアチャレンジは、2018年度は7コースに増え、海外プログラムも新規追加された。これら「フィールドスタディ」と「人間環境セミナー」、「キャリアチャレンジ」を2014年度入学生から選択必修科目（合計6単位以上修得）とし、学部生全員に対して、学部の特徴的な学びを促すことを制度化している。</p> <p>また、「研究会修了論文」に加えて、「研究会（ゼミ）」に所属していない学生向けに「コース修了論文」も2016年度から設置し、すべての学生に対して「卒業論文」に該当する単位を修得できるように制度変更を行なっている。</p> <p>加えて、グローバル化に対応する能力を涵養するため、「Study Abroad (SA)」プログラムを2016年度から設置し、海外短期留学を可能とした。同時に2016年度に開講した英語学位プログラム学生との共創の場として、新規科目「Co-Creative Workshop」を設置し、英語でアクティブラーニングを実施する機会を創設した。</p> <p>なお、一般学生とは別学則の社会人学生用「RSP（リフレッシュ・ステージ・プログラム）」の開設（2019年度）にあたり、授業のほとんどは一般学生用の既存のカリキュラムを共用することしつつ、履修制度のフレームワークは、18歳入学生とは異なり、既に人生経験の厚みを持つ社会人個々のニーズにあわせて柔軟に組み立てられる、自由度の高いカリキュラムとした。このため、卒業所要単位や転編入学生の進級要件等について、社会人が学びやすくする便宜をはかった。そして一部、RSP用の新設科目を提供することとした（RSP専用Bゼミ、ファシリテーション論等）。</p>	
<p>【2018年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「キャリアチャレンジ」プログラムの新規追加 ・RSP開設準備（新規カリキュラム追加の学則改正） 	
<p>【根拠資料】※カリキュラムツリー、カリキュラムマップの公開ホームページURLや掲載冊子名称等</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2019年度 人間環境学部 履修の手引き（web） ・2018年度 キャリアチャレンジ募集コース一覧（I期・II期、学部ホームページ） http://www.hosei.ac.jp/ningenkankyo/NEWS/zaigaku/180427.html http://www.hosei.ac.jp/ningenkankyo/NEWS/zaigaku/181123.html 	
②学生の能力育成の観点からカリキュラムの順次性・体系性を確保していますか。	S A B
<p>※カリキュラム上、どのように学生の順次的・体系的な履修（個々の授業科目の内容・方法、授業科目の位置づけ（必修・選択等）含む）への配慮が行われているか。また、教養教育と専門科目の適切な配置が行われているか、概要を記入。</p> <p>カリキュラム上、教養科目（ILAC科目）と学部専門科目は適切に配置され、それぞれにおける必修/選択必修等の位置付けがなされている。それらの順次性・体系性はナンバリングおよびカリキュラムツリー・マップを利用して可視化されている。</p> <p>学部専門科目の学びにおいては、コース制がそのコアとなる。コースの趣旨及び教育目標をより明確なものにするため、2015年度にその編成について検討を行い、コース名を変更した（サステナブル経済・経営コース、ローカル・サステナビリティコース、グローバル・サステナビリティコース、人間文化コース、環境サイエンスコース）。2016年度入学生から、2年次進級時に全学生を各コースに所属させた上で、コースコア科目（10科目20単位）を選択必修とした。また、学際的な学びを担保させるために、コース共通科目（5科目10単位）も選択必修とした。この新たな履修制度は、運用か</p>	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

ら3年が経って、学生にも問題なく浸透している。さらに、選択必修科目である「人間環境セミナー」は従来土曜日に開講していたが、選択必修化と多様な学生ニーズに対応するために、2016年度以降は平日夜間にも開講することとし、それを継続している。

なお、社会人RSP（リフレッシュ・ステージ・プログラム）は、前項にも記したように、上記の一般学生とは異なる、別学則による履修制度を適用してスタートした。卒業所要単位124以上（一般学生は130以上）、ILAC科目36単位以上（一般40以上）で1外国語選択、「リテラシー科目」2単位以上で「人間環境学への招待」「基礎演習」は必修とはせず選択科目、「社会連携科目」（FS、人間環境セミナー、キャリアチャレンジ）2単位以上、そしてコース制登録とそれに伴う必修選択は不要とする（ただし学際的な履修計画の道しるべとして参考にしてもらう）等々、教員が順次生・段階性をふまえた履修指導を行いつつも、学生の主体的な選択が可能な、自由度の高いカリキュラムを提供することにした。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・2019年度 人間環境学部 履修の手引き（web）
- ・学部HP（<http://www.hosei.ac.jp/ningenkankyo/gakka/e-system/index.html>）

③幅広く深い教養および総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養する教育課程が編成されていますか。

S A B

※カリキュラム上、どのように教養教育等が提供されているか概要を記入。

「持続可能性」について学ぶためには、学際的なアプローチが必要不可欠であるため、自分が選択する「軸」（2年次からのコース選択、ゼミ選択による専門性）に有機的に結びつける幅広い知識と総合的な判断力を涵養することが、教育課程の編成の基本である。このポリシーには、学部創設の母体となった旧第二教養部の教養カリキュラムがベースとして活かされており、社会科学系を主体としながらも、人文科学系の「人間・文化コース」、また自然科学系の「環境サイエンスコース」も立てており、文理融合の幅広い講義科目群をそなえている。

レギュラーの講義科目に加えて、変化する時代や環境に応じたトピックスを時限的に扱えるように、「人間環境特論」という科目も設けて、副題を付けて活用している。

そして教室における机上の学習にとどまらず、実社会における、多様な人々との「協働」の能力を実践的に涵養する機会として、社会の現場における実習科目「フィールドスタディ」（国内外）や、社会の窓口たる「人間環境セミナー」などの社会連携科目を設けている。加えて2017年度からは、フィールドスタディの発展型として、自治体や地域の活動団体と提携したインターンシップ型の「キャリアチャレンジ」を導入し、学生が現実の社会により深く身を置く学びの機会の充実を図っている。

【2018年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

1. 1①の同欄参照

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・学部の理念／教育目標（2019年度 人間環境学部履修の手引き）web
- ・2019年度 人間環境学部 講義概要（シラバス）web
- ・人間環境学部HP（<http://www.hosei.ac.jp/ningenkankyo/gakka/index.html>）
- ・キャリアチャレンジ説明会資料

④初年次教育・高大接続への配慮は適切に行われていますか。

S A B

※初年次教育・高大接続への配慮に関し、どのような教育内容が学生に提供されているか概要を記入。

初年度教育は二つの柱からなっている。一つ目としては、①人間環境学部での勉学の方向づけ、②人間環境学のアプローチの多様性を学ぶことを目標とする「人間環境学への招待」を必修科目として春学期に設置している。二つ目には、秋学期に少人数制／担任制の必修科目「基礎演習」を設置し、種々のリテラシー教育、学生としての勉学／生活の進め方の指導を行い、初年次教育の通年の継続性を構築している。2015年度からは社会人学生専用の「基礎演習」を設置した。また、1年次の夏休みから「フィールドスタディ」を履修できるようにし、PBLを初年次教育から採り入れている。

高大接続への配慮としては、例えば理科系分野のリメディアルの要素も兼ね備えた科目として、「サイエンスカフェ」が設置されている。また2016年度からは従来秋学期の「基礎演習」において行われていた、大学での勉学に必要な基礎的リテラシー教育（リーディングとライティングの基礎）を、春学期の「人間環境学への招待」に移設し、よりスムーズな大学教育への接続を可能とするよう配慮している。

なお、今年度から開設した社会人RSP（リフレッシュステージプログラム）では、1.1②項に記したとおり、上記「人間環境学への招待」「基礎演習」は必修とはせず選択科目と位置づけている。18歳学生の初年次教育とはニーズが異なるためである。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2019年度 人間環境学部 講義概要（シラバス） ・人間環境学への招待 講義概要 	
⑤学生の国際性を涵養するための教育内容は適切に提供されていますか。	S A B
<p>※学生に提供されている国際性を涵養するための教育に関し、どのような教育内容が提供されているか概要を記入。</p> <p>「グローバル教育推進」は、学部の長期構想「人間環境学部 2030」においてもリーディングプロジェクトの一つに挙げられている。カリキュラムにおいては、グローバル・サステナビリティコースを設置して、学生の国際性を涵養するための教育課程／科目群をより明確にしている。（なおコース制においては、自らが所属しないコースの科目も履修可能であり、国際性を涵養する科目はすべての学生に開かれている。）SGUに伴い全学で設置されたグローバルオープン科目も、自由科目の枠内で（卒業所要単位として）受講が可能である。</p> <p>他には、①「海外フィールドスタディ」、②SAプログラムがある。①は年間3、4コース設置し、学生が国際性を涵養する機会を提供しているが、随時、海外事情の変化に対して学生の安全に留意し、コースの見直しを行っている。また多くの学生に参加機会を提供するため、海外フィールドスタディ奨励金制度を設け、学生に対する旅費の補助を行っている。②は2016年度に新設された短期海外留学の機会の提供である。こちらについても奨学金による補助を行っており、広く学生に参加を呼びかける体制を整えている（2017年度秋学期から実際の派遣開始）。</p> <p>語学教育では、専門科目内のリテラシー科目として、「アクティブ語学（英語）」と「テーマ別英語」を開講している。「アクティブ語学」では、初級会話・中級会話・上級会話・ビジネス会話と、レベル別および目的別に授業を展開し、学生の発信型英語コミュニケーション能力の向上に寄与している。「テーマ別英語」では、学部の専門分野と関わり深いテーマを英語で講義・ディスカッションを行なうなど、学問的内容の学習と語学力の涵養を同時に目ざす融合型アプローチを実践している。</p> <p>2016年度秋学期から開設された英語学位プログラム（SCOPE）は、本学のSGUの重要な部分を担う事業であり、入学者アンケートでも高い評価を受けている。このSCOPEに設置された、「Co-Creative Workshop」において、留学生とともに英語でアクティブラーニングに取り組む機会が提供されていることは特筆に値する。SCOPE科目はESOP生にも随時受講されており、経営学部のGBPとともに、本大学におけるSCOPEの存在意義はきわめて大きいと自己評価できる。</p>	
<p>【2018年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <p>以下、「新規取り組み」ではないが、注目される成果をあげる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・SCOPE志願者数 22名／入学者数 9名（2018年9月入学者） ・SCOPE生／一般学生の共同科目（「Co-creative Workshop」）のべ参加者数 48名（SCOPE生 28名／一般学生 20名） ・2018年度海外FS参加者 46名、SA派遣者数 7名 ・派遣留学／認定派遣留学者は、ほぼ毎年数名が出発あるいは帰国している。また、（自主）留学のための休学者は、昨年度 19名を数えた。 	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2019年度 人間環境学部 履修の手引き ・2019年度 人間環境学部 講義概要（シラバス） ・法政大学人間環境学部海外フィールドスタディ奨励金規程 ・法政大学人間環境学部海外フィールドスタディ奨励金取扱細則 ・SAプログラム説明会資料 ・人間環境学部 HP (http://www.hosei.ac.jp/ningenkankyo/ryugaku/index.html) ・2018年度秋学期入学者アンケート（大学評価室） 	
⑥学生の社会的および職業的自立を図るために必要な能力を育成するキャリア教育は適切に提供されていますか。	S A B
<p>※学生に提供されているキャリア教育に関し、どのような教育内容が提供されているか概要を記入。</p> <p>キャリア教育に関しては、ILAC科目ゼロ群に置かれた全学共通の公開科目である「キャリア教育プログラム」科目の利用のほか、学部独自の提供として以下の内容を挙げることができる。</p> <p>本学部は基本理念の一つに「社会との交流・連携」を掲げており、現地実習プログラム「フィールドスタディ」や、社会の窓口といえる「人間環境セミナー」は、選択必修科目として学部の代表的な看板科目となっている。これらは、おのずと社会人基礎力修養の場となる。2017年度からはPBLをより深く実践的に経験する場として、受け入れ団体との提携に基づく、インターンシップ型の「キャリアチャレンジ」を開講した。</p>	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

初年次必修科目の「人間環境学への招待」でも、キャリア教育の導入教育を実施しており、上記 ILAC 科目のキャリア教育科目とは別に、学部専門科目で英語による「キャリア入門」という授業も開設している。

また、2年次から多くの学生が参加する「研究会」（ゼミ）の中には、交流のある地域を訪問して体験・実践活動をする合宿を催行するゼミや、企業の実地調査訪問研究を行うゼミ、自治体との連携活動（千代田 CES）を内容とするゼミ、「自治体職員をめざすための研究会」と称するゼミなど、社会連携・貢献の性格が豊かな研究会も少なくない。

このように、学部の理念とカリキュラム体系の特性を活用した総合的なキャリア教育の実施を進めている。

【2018年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

インターンシップ型のフィールドスタディの深化型「キャリアチャレンジ」において、海外プログラムを新設した（ハワイコース）。<http://www.hosei.ac.jp/ningenkankyo/NEWS/zaigaku/180427.html>

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・「人間環境学部のキャリア教育」＜ESDによるT字型人材&U字型人材の育成＞（学部HPの「人間環境学部について」のページに掲載）
- ・2019年度 人間環境学部 履修の手引き。
- ・2019年度 人間環境学部 講義概要（シラバス）
- ・法政フォトジャーナル2019年4月1日「長谷川ゼミが「第18回日経STOCKリーグ」で全チーム入選ー2011年初挑戦以来、8年連続入選ー」

1.2 学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。

①学生の履修指導を適切に行っていますか。

S A B

【履修指導の体制および方法】 ※箇条書きで記入。

- ・1年次教育では、入学時のオリエンテーション・ガイダンスに加えて、必修科目である「人間環境学への招待」（春学期）及び「基礎演習」（秋学期）を通じて、全員に導入的な履修指導を実施している。
- ・「人間環境学への招待」では、授業構成がコース制（2年次～）のイントロダクションになるように計画されており、コース毎に担当教員を配置している。
- ・「研究会」（2年次～）や「フィールドスタディ」（1年次から履修可）などについては、募集の時期に説明会やガイダンスを実施し、学生の履修意欲の向上に努めている。特に「研究会」は、募集の時期となる秋学期に、それにあわせて「基礎演習」での説明や研究会ガイダンスを行い、コース制との有機的なつながりに力点をおいた説明を実施している。
- ・オフィスアワーを設け、学生個々の履修相談にいつでも応じられる体制をとっている。
- ・コース別の科目の履修状況について、データで確認をしている。
- ・2015年度に履修指導体制を再検討し、留学生および社会人学生の新入生（編入学含む）に対するガイダンスを実施することにし、2016年から実施した。
- ・社会人RSP（リフレッシュステージプログラム）用に、「コミュニティ」づくりを期してRSP専用のBゼミを設けて参加を奨励し、個別の履修指導・助言も行う場としている。また、「社会人コンシェルジュ」という相談・助言役を設けている。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・2019年度 人間環境学部 履修の手引き
- ・2019年度 人間環境学部 講義概要（シラバス）
- ・コース別履修状況
- ・「人間環境学への招待」講義概要
- ・「研究会」、「フィールドスタディ」説明会関連資料

②学生の学習指導を適切に行っていますか。

S A B

※取り組み概要を記入。

初年次教育の「人間環境学への招待」（春学期必修）では、大学教育における講義の受け方、ノートテイキングの方法などを講義している。2016年度からは、1年次春学期の講義や学期末試験における論述答案に対応すべく、リーディング・ライティングスキルの基礎についても指導することとした。なお同科目が、学部のカリキュラムのコアとなる「コース制」の導入教育にあたる内容を具えていることは、前項に記した通りである。

続いて初年次秋学期の必修科目「基礎演習」では、図書館実習や、学生自らが学習する態度を身につけるノウハウを教授し、少人数教育を経験させ、本学部の学習指導上、重要な位置づけにある「研究会」での学びの基礎を習得させる。本学部では、専任教員は最低1つの「研究会A（通年）」（2～4年までが継続参加する少人数教育）を担当し、卒業論文にあ

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

る「研究会修了論文」の指導を行う。なお、ゼミに所属しない学生に対して、卒業論文に相当する「コース修了論文」を執筆できる制度を2016年度より導入した。

その他、オフィスアワーの時間を中心として、履修やカリキュラムに関する質問等、学習の方法に関する学生の質問に応じる体制がある。学務でも職員が随時学習指導のサポートに協力してくれている。また成績不振者に対しては個別面談などにより、履修/学習上の問題解決に取り組んでいる。

【**根拠資料**】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・2019年度 人間環境学部 履修の手引き
- ・2019年度 人間環境学部 講義概要（シラバス）

③学生の学習時間（予習・復習）を確保するための方策を行なっていますか。

S A B

※取り組み概要を記入。

すべての授業において授業外で行うべき学習活動（準備学習等）が指示されており、その内容はシラバスによって周知されている。少人数教育である「研究会」では、学生が予習・復習を行ってこることが前提となっており、「研究会」の中には、サブゼミを開設している場合も多い。これら正規の研究会以外の時間において、学習（予習・復習）を行うことに対して、担当教員が適宜、指示をしている。

【**根拠資料**】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・2019年度 人間環境学部 講義概要（シラバス）

④教育上の目的を達成するため、効果的な授業形態の導入に取り組んでいますか。

S A B

【**具体的な科目名および授業形態・内容等**】※箇条書きで記入（取組例：PBL、アクティブラーニング、オンデマンド授業等）。

- ・「フィールドスタディ」はPBLを実践する授業である。学部設立時から学部の特色ある科目として、重点的に取り組んでいる。
- ・「研究会」においても、グループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等によって、アクティブラーニングが実践されている。上記「フィールドスタディ」に準ずる地域の現場体験・実践の内容をもつゼミ合宿や企業訪問・調査活動を行なっている研究会も少なくない。
- ・「SAプログラム」においては、短期集中型の語学教育/異文化理解教育を実践している。
- ・フィールドスタディの発展プログラムであるインターンシップ型の「キャリアチャレンジ」においては、より深く実社会でのPBLに参画する機会が提供される。
- ・「Co-Creative Workshop」においては、文化を異にする留学生と、英語を通じたアクティブラーニングを実践する機会が提供される。

【**根拠資料**】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・2017年度 人間環境学部 履修の手引き
- ・2017年度 人間環境学部 講義概要（シラバス）

⑤それぞれの授業形態（講義、語学、演習・実験等）に即して、1授業あたりの学生数が配慮されていますか。

S A B

※どのような配慮が行われているかを記入。

- ・「研究会」「フィールドスタディ」「キャリアチャレンジ」などPBLやアクティブラーニングを実施する授業においては、定員を設け、学生の授業への積極的な参加を確保しつつより深い学びへと誘導する配慮を行っている。
- ・語学授業についても定員を設け、学生の授業参加/発言の機会を確保し、語学能力の獲得に適した環境の整備をはかっている。昨年度より、英語の必修クラス授業規準人数は28名から24名（他学部と同様の上限）に変更され、授業環境の改善を実現した。

【**根拠資料**】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・2019年度 人間環境学部 講義概要（シラバス）

1.3 成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。

①成績評価と単位認定の適切性を確認していますか。

S A B

【**確認体制および方法**】※箇条書きで記入。

- ・成績評価は基本的に担当教員の裁量事項であるが、A+からD、Eまでの評価割合は学部執行部として把握している。とくにA+の割合については、大学の基準を周知している。

【**根拠資料**】※ない場合は「特になし」と記入。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

・特になし	
②厳格な成績評価を行うための方策を行っていますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
<p>※取り組み概要を記入。</p> <p>学部別に集計された GPCA と全学の GPCA を教授会構成員に周知している。さらに、試験における不正行為を防止するために、定期試験における参照物についての申し合わせ事項を策定している。</p> <p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教授会議事録 ・定期試験における参照物の取扱いについて 	
③学生の就職・進学状況を学部（学科）単位で把握していますか。	<input checked="" type="checkbox"/> はい いいえ
<p>※データの把握主体・把握方法・データの種類等を記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・報告があった学生に限定されるが、実績は把握している。 ・4年生に対しては進路が決定次第、大学に報告するように指導している。 <p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学部パンフレット、HP (http://www.hosei.ac.jp/ningenkankyo/shushoku/index.html) 	
1.4 学位授与方針に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	
①成績分布、進級などの状況を学部（学科）単位で把握していますか。	<input checked="" type="checkbox"/> はい いいえ
<p>※データの把握主体・把握方法・データの種類等を記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・データの把握主体：教授会執行部および教授会構成員 ・把握方法：学務部によるデータ、学部長会議で提示された資料 ・データの種類：成績上位者の分布、進級状況 <p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教授会議事録 	
②分野の特性に応じた学習成果を測定するための指標の適切な設定または取り組みが行われていますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
<p>※取り組みの概要を記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・従来「研究会修了論文」および「コース修了論文」の執筆者数を学習成果測定の一つの指標としている。 ・当学部は文系・理系も含め特定の分野の枠におさまらない融合的なカリキュラムを有しているため、統一的な学習成果測定指標の設定は難しい作業であると考えている。しかし、学習成果の把握や測定の重要性は認識しており、そのための議論・検討を開始したところである。 ・一部の科目においては、事前・事後の形で学生自らが自身の成長を把握、評価するような仕組みを導入しており、それらグッドプラクティスを学部として組織的に活用できる方策についても検討を開始したところである。 <p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教授会議事録 	
③具体的な学習成果を把握・評価するための方法を導入または取り組みが行われていますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
<p>※取り組みの概要を記入（取り組み例：アセスメント・テスト、ルーブリックを活用した測定、学修成果の測定を目的とした学生調査、卒業生・就職先への意見聴取、習熟度達成テストや大学評価室卒業生アンケートの活用等）。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ゼミに所属する学生については、担当教員が受講態度やレポート、研究会修了論文等で随時、測定している。また 2016 年度からはゼミに所属していない学生にも卒業論文にあたる「コース修了論文」の執筆が可能となる制度を導入し、「研究会（ゼミナール）」に所属していない学生についても学習成果を把握するための体制を整備した。 ・SA プログラムに参加した学生に関しては、派遣前後の英語外部試験のスコアを比較し、海外語学研修の成果の把握に努めた。 ・また、学部全体の傾向を把握するために、大学評価室卒業生アンケートの結果を教授会で確認している。 <p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2019 年度 人間環境学部 履修の手引き 	
④学習成果を可視化していますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
<p>※取り組みの概要を記入。取り組み例：専門演習における論文集や報告書の作成、統一テストの実施、学生ポートフォリオ等。</p>	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基礎的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

<ul style="list-style-type: none"> ・フィールドスタディ報告書を作成し、「フィールドスタディ」の全コースの実施状況を可視化している。 ・研究会における「研究会修了論文」の冊子化を行っている。 ・「研究会修了論文」のタイトルは、学部紀要（人間環境論集）および学部HPで公開している。 	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2019年度 人間環境学部 履修の手引き ・フィールドスタディ報告書 ・研究会修了論文集 ・学部紀要（人間環境論集） ・人間環境学部HP (http://www.hosei.ac.jp/ningenkankyo/gakka/thesis/index.html) 	
1.5 教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みも行っているか。	
①学習成果を定期的に検証し、その結果をもとに教育課程およびその内容、方法の改善に向けた取り組みを行っていますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
<p>※検証体制および方法、改善・向上に向けた取り組みの概要を記入。</p> <p>教育課程およびその内容、方法の適切性については、主としてカリキュラム基本制度委員会において定期的に点検・評価を行っている。また年度ごとに質保証委員会においても点検・評価を行っている。</p> <p>具体的には以下のような手法・データを用いて検証を行っている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「フィールドスタディ」および「研究会」については応募状況・参加者数を分析し、適切な科目設置の検討を行っている。 ・「研究会修了論文」および「コース修了論文」の執筆者数の把握をしている ・1年次必修科目の「人間環境学への招待」において、入学直後（4月）と春学期終了時（7月）で独自の授業アンケートを行い、入試経路別に人間環境学部の学びに対する姿勢などについての分析を実施し、教育内容・方法の改善をすべく検証を行っている。 	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・カリキュラム基本制度委員会議事録 ・研究会別 研究会修了論文提出率 ・2018年度 人間環境学部 1年次アンケート集計結果 	
②学生による授業改善アンケート結果を組織的に利用していますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
<p>※利用方法を記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業改善アンケート結果の利用は、主に担当教員に委ねられているものの、学部執行部がアンケート結果をチェックし、問題点の洗い出しのためにスクリーニングを行っている。 	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・特になし 	

(2) 長所・特色

内容	点検・評価項目
<ul style="list-style-type: none"> ・教育課程の編成においては、以下の二つの点が長所・特色と考えている。 	
(1)文理融合の幅広い分野を収める学部カリキュラムであるため、学生の学習成果の向上、学際的な履修を可能とすると同時に、順次性、体系性を明確にするために「コース制」を導入し、学生の履修指導に活用している。	1.1. ①②③
(2)種々の社会的要請に応えるべくメニューの多様化・充実を図ってきた。特に、グローバル化、PBLやアクティブラーニング、キャリア教育、社会連携の分野に関しては、充実した科目構成を実現している。	1.1. ⑤⑥

(3) 問題点

内容	点検・評価項目
学習成果の把握・評価に関しては、具体的なさらなる可視化の方策や新たな指標設定など、今後、議論・検討を継続する必要がある。	1.4②③④

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

【この基準の大学評価】

①教育課程・教育内容に関すること (1.1)

人間環境学部では、専門科目をカリキュラムポリシーに基づいて体系立て、段階的な能力育成が可能な環境を整えている。そして、学際性のコンセプトは5つのコースに反映されている。「社会との交流・連携」のコンセプトでは、「フィールドスタディ」「人間環境セミナー」、そして「キャリアチャレンジ」と学部の特徴的な学びを促す科目を選択必修科目として制度化している。ゼミに所属していない学生のための「コース修了論文」の設置や英語によるアクティブラーニング「Co-Creative Workshop」の新規開講など、教育課程の編成・実施方針に基づいた教育課程・教育内容は適切に提供されていると評価できる。

教養科目（ILAC科目）と学部専門科目は適切に配置され、必修・選択必修などの位置づけがなされており、カリキュラムの順次制・体系性は確保されている。社会科学系を主体としながらも、人文科学系、自然科学系のコースも設定されており、文理融合の幅広い講義科目群を備え、深い教養と豊かな人間性を汎用する教育課程となっていると評価できる。初年次教育は、春学期に必修科目「人間環境学への招待」、秋学期は「基礎演習」を設置し、種々のリテラシー教育、学生としての教育/生活の指導を行い、通年の継続性を構築している。「フィールドスタディ」は1年次の夏休みから履修できる。高大接続に関しては「サイエンスカフェ」を設置、リテラシー教育を春学期に行うことでよりスムーズな大学教育への接続を可能としている。

グローバル教育の推進は学部の長期構想のリーディングプロジェクトの1つでもあり、海外フィールドスタディ、SAプログラム、アクティブ英語、テーマ別英語、英語学位プログラム（SCOPE）や全学で設置されているグローバルオープン科目など、学生が国際性を涵養するための機会は充実しており適切に設置されている。

キャリア教育については、全学共通科目である「キャリア教育プログラム」をはじめ、「フィールドスタディ」「人間環境セミナー」「キャリアチャレンジ」「キャリア入門」など、学部理念をカリキュラム体系の特性を活用した総合的なキャリア教育の実施を進めており、評価できる。

②教育方法に関すること (1.2)

1年次には、入学時オリエンテーション、ガイダンスに加え、必修科目「人間環境学への招待」「基礎演習」を通じ、導入的な履修指導を実施し、2年次のコース制のイントロダクションが計画されている。説明会やガイダンスを実施するとともにオフィスアワーの設定により学生個々の履修相談に応じる体制を整えており、学生の履修指導は適切に行われていると評価できる。

学生の学習指導に関しては、「人間環境学への招待」で基礎的な学習方法や学習スキルを指導し、少人数制の「基礎演習」で図書館実習や学習態度を、「研究会」で学びの基礎を習得させている。また、ゼミに所属していない学生に対しては「コース修了論文」を執筆できる制度を導入している。教員、職員ともに学習指導のサポートに協力する体制をとっており、成績不振者への対応についても個別面談などにより問題解決を図っている。

授業外で行うべき学習活動（準備学習等）は、すべてシラバスにおいて周知されており、「研究会」に関してはとくに、学生の学習時間（予習・復習）を確保し、担当教員が適宜、指示するなど体制が整っている。

教育上の目的を達成するため、効果的な授業形態として、「フィールドスタディ」「研究会」「キャリアチャレンジ」などPBLを実践する授業が展開され、英語によるアクティブラーニング「Co-Creative Workshop」が導入されている。1授業当たりの学生数に関しては、PBLを実践する「フィールドスタディ」「研究会」「キャリアチャレンジ」では学生の授業への積極的参加と深い学びへの誘導への配慮から定員制とし、語学の必修クラス授業基準人数も28名から24名に制限し、適切に配慮されている。

③学習成果・教育改善に関すること (1.3～1.5)

人間環境学部では、A+からD、Eまでの評価割合は学部執行部が把握し、とくにA+の割合に関しては大学の基準を周知している。また、学部別のGPCAと全学のGPCAを教授会構成員に周知することで成績・単位を学部として適切に把握、厳格な成績評価を行う方策が行われており、不正防止策も策定されている。学生の就職・進路に関しては決定次第大学に報告するように指導している。成績の分布、進級状況とともに教授会構成員が把握している。

学習成果の測定は、「研究会修了論文」および「コース修了論文」の執筆者数を1つの指標としており、ゼミに所属していない学生の学習評価の把握ができるようになってきている。また、SAプログラムに参加した学生へ派遣前後の英語外部試験のスコアの比較や大学評価室卒業生アンケートの結果の確認から学習成果の把握・評価を適切に行っている。

学習成果の可視化に関しては、フィールドスタディ報告書の作成や、「研究会修了論文」の冊子化によって行われ、「研

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

研究会修了論文」については学部紀要および学部 HP で公開されている。

教育課程およびその内容、方法については、カリキュラム基本制度委員会や質保証委員会において定期的に点検・評価が行われている。また、入学経路別に学生の学びに対する姿勢などを分析し、教育内容・方法の改善について検証が行われている。授業改善アンケート結果は、執行部が結果をチェックし、問題点の洗い出しのためにスクリーニングを行っている。

以上の点から、教育課程・学習成果について適切な活動が行われていると評価できる。

2 教員・教員組織

【2019年5月時点の点検・評価】

2.1 教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。

①学部（学科）内のFD活動は適切に行なわれていますか。

S A B

【FD活動を行うための体制】※箇条書きで記入。

- ・カリキュラム・基本制度委員会において、学部内のFD活動に関する検討を行なっている。
- ・FD推進チームを設置し、執行部と連携をとりつつ、FD推進センターの取り組みもふまえた活動をすすめる体制が作られている。

【2018年度のFD活動の実績（開催日、場所、テーマ、内容（概要）、参加人数等）】※箇条書きで記入。

- ・春学期講義科目（「人間環境学への招待」）における授業相互参観を実施。
- ・フィールドスタディにおいて複数教員で担当することにより、お互い指導方法や内容に関するアドバイスを交換している。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・2018年度 授業相互参観実施報告書
- ・人間環境学部 人事戦略（2017年3月22日）

②研究活動や社会貢献等の諸活動の活性化や資質向上を図るための方策を講じていますか。

S A B

※取り組みの概要を記入。

本学部は、20世紀までの専門学部とは異なって、人文・社会・自然科学に亘って多様な専門領域を持つ教員が集まる組織であり、個々が学部の理念・目的を共有し、組織的に学際性を発揮するためには、自分の専門領域とは異なる分野からも刺激を受け、可能な範囲で視野と教育・研究の幅を広げて「協働」の効果をあげられるよう、資質向上に努める必要がある。

そのため、教員個々は、本来の専門分野の研究で精進するのみではなく、「人間環境学会」（学部教員・学生が会員）の機関誌『人間環境論集』で他者の研究内容に目を通したり、有志が共同研究を行なったり（2018年度は、国際開発学・国際協力・自然環境政策を専門領域とする3教員の実施例あり）、同学会のシンポジウムを共同企画・運営したり、といった経験を地道に積み上げている。東日本大震災を契機に、大学が社会に対して何を出来るか、という切実な自問意識で始まった、教職員と学生の共同企画による特別セミナー「とにかく考えてみよう」（略称「トニカン」）は、特に新任教員など若手教員が積極的に参画して、昨2018年度までで開催は16回を数えている。

授業（教育）において、学部の初年次教育としてきわめて重要な必修科目「人間環境学への招待」は、コーディネーターの企画のもとに多くの教員が講義に参加するオムニバス型式をとっているが、近年は、1回1人ではなく、意図的に、互いに専門分野を異にする2人ないし3人の「コラボ」で1回の授業を創るという試みを行なっている。また「フィールドスタディ」においても、主担当教員が、サブの引率者としてあえて領域を異にする教員（特に若手教員）と組んで催行する事例も珍しくない。「人間環境セミナー」の企画も同様で、昨年度は秋学期に「野鳥を通して考える人と社会の未来」と題して、自然環境保全を専門とする教員と、環境社会学を専門とする教員のコラボによる企画が行われた。

これらは自ずと、学部教員としての資質向上をめざしたFD活動の意味をもつといえる。このような意識を高めた教員の輪による活動が、本学部らしい研究実績や社会貢献等の活性化を促すと考えられる。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・2018年度「人間環境学への招待」実施予定（学生への配布プリント）
- ・人間環境学部20周年記念シンポジウム（企画書または内容チラシ）
- ・2018年度「とにかく考えてみよう」実施記録
- ・2018年度秋学期「人間環境セミナー」の掲示内容

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

(2) 長所・特色

内容	点検・評価項目
特記すべき顕著な実績があるかといえば、「特になし」と謙虚に記すのが妥当であるが、同じ専門分野の教員は2人といないという学部の教員組織の多様性の特色は、「協働」の豊かな可能性の観点から、既存の学部にはないFDのポテンシャルを秘めていると自己評価できる。	2.1②

(3) 問題点

内容	点検・評価項目
特に学習成果の把握に関しては、グッドプラクティスの発掘など、引き続き検討に努める必要がある。	2.1①②

【この基準の大学評価】

人間環境学部のFD活動については、カリキュラム基本制度委員会において検討がなされ、FD推進チームを設置し、執行部との連携をとりつつ相互授業参観や、授業の複数教員担当など、FD活動を適切に進める体制が適切にとられていると評価できる。

研究活動においては、人間環境学会の機関紙「人間環境学」の発行や共同研究、特別セミナーなどを実施し、授業においてはオムニバス型や異なる領域の教員と組んで遂行する授業を採用し、活性化や質向上の方策が具体的にとられていると評価できる。報告書からみると、外部に公開されたシンポジウムやセミナー、外部団体との協定に基づく授業、外部組織と連携したセミナーの実施など社会貢献や外部組織との教育研究は積極的であり、評価できる。特に、社会貢献活動については、学部の理念・目的に基づき、ゼミやフィールドスタディなども含めて様々な取り組みが行われており、さらなる可視化に期待したい。

III 2018年度中期目標・年度目標達成状況報告書

No	評価基準	理念・目的	
1	中期目標	学部長期構想に記載した理念・目的を確認する	
	年度目標	学部長期構想に記載した理念・目的を確認する	
	達成指標	必要に応じた学部長期構想の改訂	
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	A
		理由	今期は特に改訂の必要なしと判断した（2018年3月28日に改訂済み）
		改善策	—
質保証委員会による点検・評価			
所見	執行部による点検・評価内容に異議なし。		
改善のための提言	—		
No	評価基準	内部質保証	
2	中期目標	適正なPDCAサイクルの運営を継続する	
	年度目標	①必要なPDCAサイクルを適時適切に運用する。	
	達成指標	①質保証委員会の開催実績	
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	A
		理由	目標に沿った運用がなされている。
		改善策	—
質保証委員会による点検・評価			
所見	執行部による点検・評価内容に異議なし。		
改善のための提言	—		

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

No	評価基準	教育課程・学習成果【教育課程・教育内容に関すること】	
3	中期目標	学部長期構想に記されたコアミッションに基づき、持続可能な社会の構築に貢献するための教育を実践する。また、同じく長期構想にて再定義された教育におけるミッションを踏まえ教育内容のさらなる改善をすすめる。	
	年度目標	①「持続可能な開発目標（SDGs）」を視野に入れ、学部カリキュラムをESD（持続可能な発展のための教育）のコンセプトを用いて体系化する。	
	達成指標	①パンフレット、履修の手引き、ガイダンス等でのESD（SDGsを含む）への言及・周知。SDGsを明示的に扱う科目数の増加。	
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	A
		理由	・シラバス上SDGsとの関わりを明記した科目数9科目（2018実績）→17科目（2019予定）。 ・ESDを用いた体系化の取り組みは継続中である。
		改善策	－
質保証委員会による点検・評価			
所見		・シラバス上でのSDGsとの関わりを明記した科目が約倍増したことは評価できる。ESDを用いた体系化については継続して対応されたい。	
改善のための提言	－		
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育課程・教育内容に関すること】	
4	中期目標	学部長期構想に記されたコアミッションに基づき、持続可能な社会の構築に貢献するための教育を実践する。また、同じく長期構想にて再定義された教育におけるミッションを踏まえ教育内容のさらなる改善をすすめる。	
	年度目標	②英語学位プログラム（SCOPE）の安定的運営と、学部本体とのカリキュラム上の相互乗り入れ等を通じた教育資源としての有効活用を図る。（リーディングプロジェクトⅠ） ③海外FSへの参加者の確保とSAの制度としての定着を図るとともに、グローバル教育の体系化を進める。	
	達成指標	②SCOPE志願者数／入学者数および相互乗り入れ学生数 ③海外FS参加者数、SA参加者数、グローバル教育ツリー（仮称）の作成と公表	
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	A
		理由	・SCOPE志願者数22名／入学者数9名（2018年9月入学者） ・SCOPE生／一般学生の共同科目（「Co-creative Workshop」）のべ参加者数48名（SCOPE生28名／一般学生20名） ・2018年度海外FS参加者46名、SA派遣者数4名 ・SCOPEやSAを通じたグローバル教育は進展している。 ・グローバル教育ツリー（仮称）は検討中。
		改善策	－
質保証委員会による点検・評価			
所見		執行部による点検・評価内容に異議なし。	
改善のための提言	－		
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育課程・教育内容に関すること】	
5	中期目標	学部長期構想に記されたコアミッションに基づき、持続可能な社会の構築に貢献するための教育を実践する。また、同じく長期構想にて再定義された教育におけるミッションを踏まえ教育内容のさらなる改善をすすめる。	
	年度目標	④社会人教育の再構築を担うリフレッシュステージプログラム（RSP）を開設し、軌道にのせる。	
	達成指標	④RSP説明会参加者数／出願者数／入学者数	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	A
		理由	・RSPを2019年4月に開設することとし、2018年度に同入試を実施した。 ・説明会参加者数約20名／出願者数19名／入学者数7名（2019入学予定者。編入含む）
		改善策	－
		質保証委員会による点検・評価	
		所見	執行部による点検・評価内容に異議なし。
		改善のための提言	－
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育課程・教育内容に関すること】	
6	年度末報告	中期目標	学部長期構想に記されたコアミッションに基づき、持続可能な社会の構築に貢献するための教育を実践する。また、同じく長期構想にて再定義された教育におけるミッションを踏まえ教育内容のさらなる改善をすすめる。
		年度目標	⑤キャリアチャレンジの活用などを通じたキャリア教育のさらなる体系化をすすめる。
		達成指標	⑤キャリアチャレンジコース数、参加者数、キャリア教育ツリー（仮称）の作成と公表
		教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	A
		理由	・キャリアチャレンジ2018年度実績は7コース29名の参加があり、十分に活用されている。
		改善策	－
質保証委員会による点検・評価			
所見	執行部による点検・評価内容に異議なし。		
改善のための提言	－		
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育課程・教育内容に関すること】	
7	年度末報告	中期目標	学部長期構想に記されたコアミッションに基づき、持続可能な社会の構築に貢献するための教育を実践する。また、同じく長期構想にて再定義された教育におけるミッションを踏まえ教育内容のさらなる改善をすすめる。
		年度目標	⑥教育のみならず、研究、社会貢献の要素も含んだ、SDGsに関連するプロジェクトを企画し重点的に取り組む。
		達成指標	⑥SDGsプロジェクト企画の立案と実施
		教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	A
		理由	・新潟県上越市や長野県飯田市との連携などを通じて模索中である。
		改善策	－
質保証委員会による点検・評価			
所見	執行部による点検・評価内容に異議なし。		
改善のための提言	－		
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育方法に関すること】	
8	年度末報告	中期目標	持続可能な社会の構築に向けた「実践知」の修得のため、多様な主体と協働しつつ、主体性をもって学ぶ姿勢を強化する教育を推進する。
		年度目標	①アクティブラーニングの要素を可能な範囲で採り入れ、学生の主体的な学びの姿勢を引き出す科目を増加する。
		達成指標	①アクティブラーニングを活用した科目数の増加
	自己評価	教授会執行部による点検・評価	
		A	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

		理由	・アクティブラーニングの要素を取り入れた授業を設置している。157科目（約75% 2019年度予定）	
		改善策	－	
		質保証委員会による点検・評価		
		所見	執行部による点検・評価内容に異議なし。	
		改善のための提言	－	
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育方法に関すること】		
9	中期目標	持続可能な社会の構築に向けた「実践知」の修得のため、多様な主体と協働しつつ、主体性をもって学ぶ姿勢を強化する教育を推進する。		
	年度目標	②研究会、フィールドスタディ、Co-Creative Workshop、Field Workshop など、既存科目を活用しPBL（課題解決型学習）の充実を図る。		
	達成指標	②PBL型科目数の増加。PBL型科目におけるグッドプラクティスの発掘。		
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価		
		自己評価	A	
		理由	・FS、キャリアチャレンジ、Co-creative Workshop、Field workshop、CESゼミを継続実施した。 ・従来の取り組み以上のPBL型科目設置やグッドプラクティス発掘については検討を継続している。	
		改善策	－	
		質保証委員会による点検・評価		
所見		執行部のみで対応するのではなく、関連委員会などを通じて、組織的多面的に検討に取り組む必要がある。		
改善のための提言	関連委員会などの活用を通じた検討をすすめる。			
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育方法に関すること】		
10	中期目標	持続可能な社会の構築に向けた「実践知」の修得のため、多様な主体と協働しつつ、主体性をもって学ぶ姿勢を強化する教育を推進する。		
	年度目標	③社会人学生、留学生など多様な主体が学び交わる環境の整備と活用を一層進める。（人間環境倶楽部の一層の活用を含む）		
	達成指標	③多様な主体が集う場（講義、イベント等）の設置／実施回数		
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価		
		自己評価	A	
		理由	・人間環境学特別セミナー（「トニカン」）1回開催。 ・学部開設20周年記念シンポジウム開催	
		改善策	－	
		質保証委員会による点検・評価		
所見		執行部による点検・評価内容に異議なし。		
改善のための提言	－			
No	評価基準	教育課程・学習成果【学習成果に関すること】		
11	中期目標	文理融合でありかつ特定の分野の枠に収まらない教育課程に対し、いかなる学習成果の把握、可視化の手法があるのか、グッドプラクティスを積み上げつつ体系化を目指す。		
	年度目標	①学習成果の把握、可視化のためのグッドプラクティスを発掘し、指標の開発も含め組織的な活用の可否について検討を進める。		
	達成指標	①新たな指標の開発と検討実績		
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価		
		自己評価	B	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

		理由	・カリキュラム委員会などを通じた制度的な検討が継続中である。	
		改善策	カリキュラム委員会などを通じた制度的な検討に引き続き積極的に取り組む。	
		質保証委員会による点検・評価		
		所見	執行部のみで対応するのではなく、関連委員会などを通じて、組織的多面的に検討に取り組む必要がある。	
		改善のための提言	関連委員会などの活用を通じた検討をすすめる	
No	評価基準	教育課程・学習成果【学習成果に関すること】		
12	中期目標	文理融合でありかつ特定分野の枠に収まらない教育課程に対し、いかなる学習成果の把握、可視化の手法があるのか、グッドプラクティスを積み上げつつ体系化を目指す。		
	年度目標	②研究会修了論文およびコース修了論文の執筆者数の維持、増加に努める。		
	達成指標	②研究会修了論文執筆者数、コース修了論文執筆者数の維持もしくは増加。		
		教授会執行部による点検・評価		
		自己評価	A	
		理由	・研究会修了論文執筆者数 168 名、コース修了論文執筆者数 1 名であり、例年並みの執筆者を確保した。	
		改善策	-	
		質保証委員会による点検・評価		
		所見	執行部による点検・評価内容に異議なし。	
		改善のための提言	-	
No	評価基準	教育課程・学習成果【学習成果に関すること】		
13	中期目標	文理融合でありかつ特定分野の枠に収まらない教育課程に対し、いかなる学習成果の把握、可視化の手法があるのか、グッドプラクティスを積み上げつつ体系化を目指す。		
	年度目標	③語学や異文化コミュニケーションについては外部試験スコア、留学実績などの指標としての活用を検討する。		
	達成指標	③語学に関する外部試験スコアのサンプル調査。(可能な範囲で私費留学も含めた) 留学実績		
		教授会執行部による点検・評価		
		自己評価	A	
		理由	・SA 参加者の外部英語試験スコアの確認を行なった。 ・派遣留学/認定派遣留学者数 0 名、留学のための休学者数 19 名となった。	
		改善策	-	
		質保証委員会による点検・評価		
		所見	執行部による点検・評価内容に異議なし。	
		改善のための提言	-	
No	評価基準	教育課程・学習成果【学習成果に関すること】		
14	中期目標	文理融合でありかつ特定分野の枠に収まらない教育課程に対し、いかなる学習成果の把握、可視化の手法があるのか、グッドプラクティスを積み上げつつ体系化を目指す。		
	年度目標	④各種社会連携科目への学生の参加動向を把握/分析する。		
	達成指標	④社会連携科目ごとの参加者数 (応募者数)		
		教授会執行部による点検・評価		
		自己評価	A	
		理由	・以下の学生の参加があった。 FS (FW を含む) キャリアチャレンジ 29 名 人間環境セミナー 847 名 CES ゼミ 33 名	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

		改善策	—	
		質保証委員会による点検・評価		
		所見	執行部による点検・評価内容に異議なし。	
		改善のための提言	—	
No	評価基準	学生の受け入れ		
15	中期目標	2016年度に策定した入試戦略に基づき、18歳人口の減少を迎える2018年以降の社会環境において、定員超過に留意しつつ定員の充足に努める。		
	年度目標	①志願者の動向、入学者の成績などの要素を勘案した、高校ターゲット層の選定と効果的な入試広報の実施。		
	達成指標	①高校ごとに分類された入試広報実績数		
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価		
		自己評価	A	
		理由	・一般入試A日程志願者数は2,594名であり2017年度比655名増であり、広報活動には十分な効果があったと考えられる。	
		改善策	—	
		質保証委員会による点検・評価		
		所見	執行部による点検・評価内容に異議なし。	
			改善のための提言	—
No	評価基準	学生の受け入れ		
16	中期目標	2016年度に策定した入試戦略に基づき、18歳人口の減少を迎える2018年以降の社会環境において、定員超過に留意しつつ定員の充足に努める。		
	年度目標	②多様な主体の協働を可能とする学習環境確保のため、留学生、社会人学生の安定的な確保を継続する。		
	達成指標	②留学生志願者数/入学者数、社会人学生志願者数/入学者数		
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価		
		自己評価	A	
		理由	・留学生、社会人学生いずれも十分な入学者が確保できる見込み。 ・留学生志願者数125名/入学者数9名(予定)、社会人学生志願者数19名/入学者数7名(予定)	
		改善策	—	
		質保証委員会による点検・評価		
		所見	執行部による点検・評価内容に異議なし。	
			改善のための提言	—
No	評価基準	学生の受け入れ		
17	中期目標	2016年度に策定した入試戦略に基づき、18歳人口の減少を迎える2018年以降の社会環境において、定員超過に留意しつつ定員の充足に努める。		
	年度目標	③入試戦略にかかわる政策文書の改定		
	達成指標	③入試戦略にかかわる政策文書		
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価		
		自己評価	A	
		理由	・年度入試戦略を制定した。	
		改善策	—	
質保証委員会による点検・評価				
所見	執行部による点検・評価内容に異議なし。			

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

		改善のための提言	—	
No	評価基準	教員・教員組織		
18	中期目標	学部長期構想および人事戦略に基づき、適切な教員組織の維持を図る。また、持続的なFD活動を実施し、イノベーションの基盤の整備に努める。		
	年度目標	①各種課題の共有と新たな制度構築などイノベーションの基盤となるFD活動の一層の活用		
	達成指標	①FD活動実績		
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価		
		自己評価	B	
		理由	・年度当初にカリキュラム委員会と合同でFD推進チーム会合を開催した。引き続き検討中。 ・20周年記念行事をテコに教員間での課題共有などのFD活動を実施した。	
		改善策	引き続き制度的なFDの推進に努める。	
		質保証委員会による点検・評価		
所見		執行部のみで対応するのではなく、関連委員会などを通じて、組織的多面的に検討に取り組む必要がある。		
改善のための提言	関連委員会などの活用を通じた検討をすすめる。			
No	評価基準	教員・教員組織		
19	中期目標	学部長期構想および人事戦略に基づき、適切な教員組織の維持を図る。また、持続的なFD活動を実施し、イノベーションの基盤の整備に努める。		
	年度目標	②人事戦略に基づいた適時適切な専任採用の継続		
	達成指標	②専任人事採用実績		
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価		
		自己評価	A	
		理由	・2018年4月 1名採用 ・2019年4月 3名採用	
		改善策	—	
		質保証委員会による点検・評価		
所見		執行部による点検・評価内容に異議なし。		
改善のための提言	—			
No	評価基準	教員・教員組織		
20	中期目標	学部長期構想および人事戦略に基づき、適切な教員組織の維持を図る。また、持続的なFD活動を実施し、イノベーションの基盤の整備に努める。		
	年度目標	③英語学位プログラム（SCOPE）の任期付き教員の安定的な採用の継続		
	達成指標	③SCOPE人事採用実績		
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価		
		自己評価	A	
		理由	・2019年4月 1名採用	
		改善策	—	
		質保証委員会による点検・評価		
所見		執行部による点検・評価内容に異議なし。		
改善のための提言	—			
No	評価基準	教員・教員組織		
21	中期目標	学部長期構想および人事戦略に基づき、適切な教員組織の維持を図る。また、持続的なFD活動を実施し、イノベーションの基盤の整備に努める。		

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

	年度目標	④兼任人事の効果的・効率的な運営	
	達成指標	④兼任人事採用実績	
年度末報告	教授会執行部による点検・評価		
	自己評価	A	
	理由	・2019年度新規着任予定者 19名	
	改善策	—	
	質保証委員会による点検・評価		
	所見	執行部による点検・評価内容に異議なし。	
	改善のための提言	—	
No	評価基準	学生支援	
22	中期目標	多様な学生のニーズを念頭におき、学習支援、生活支援を組織的に実施する。	
	年度目標	①多様な学生のニーズに応えられるように学習支援、学生支援（生活支援も含む）に組織的に取り組む体制整備を図る。	
	達成指標	①学生支援のための体制確立	
	教授会執行部による点検・評価		
	自己評価	A	
	理由	・学部内支援体制のさらなる充実を検討中である。	
	改善策	—	
年度末報告	質保証委員会による点検・評価		
	所見	執行部による点検・評価内容に異議なし。	
	改善のための提言	—	
	No	評価基準	学生支援
	23	中期目標	多様な学生のニーズを念頭におき、学習支援、生活支援を組織的に実施する。
		年度目標	②授業改善アンケート、学生モニター制度など学生の声を聞く機会を引き続き活用し、そこから得られた気づきを制度改善等につなぐ努力を継続する。
		達成指標	②授業改善アンケート／学生モニター利用実績
教授会執行部による点検・評価			
自己評価		A	
理由		・授業改善アンケート結果の教授会での共有、執行部によるチェックを実施。 ・学生モニター利用結果の教授会での共有を実施。	
改善策		—	
年度末報告	質保証委員会による点検・評価		
	所見	執行部による点検・評価内容に異議なし。	
	改善のための提言	—	
	No	評価基準	学生支援
	24	中期目標	多様な学生のニーズを念頭におき、学習支援、生活支援を組織的に実施する。
		年度目標	③成績不振者面談等から学生の属性や（入学経路等）抱える問題に応じた分析、対応の検討を図り、問題を可能な限り未然に防ぐ体制を検討する。
		達成指標	③成績不振者面談実績
教授会執行部による点検・評価			
自己評価		A	
理由		・成績不振者面談を実施した。（18名と面談。うち4名が留学生。）	
改善策		—	
年度末報告	質保証委員会による点検・評価		

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

		所見	執行部による点検・評価内容に異議なし。	
		改善のための提言	—	
No	評価基準	社会連携・社会貢献		
25	中期目標	学部長期構想に記された通り、「社会に開かれた学部」として社会貢献・社会連携をすすめ、学部の社会的責任（FSR）を果たす。		
	年度目標	①学部創設 20 周年にあわせ、記念プロジェクト企画など複数の事業を組み合わせることも含めた社会貢献・社会連携を図る。		
	達成指標	①学部創設 20 周年企画の立案と実施		
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価		
		自己評価	A	
		理由	・学部開設 20 周年シンポジウムを実施した。（10 月 20 日）	
		改善策	—	
		質保証委員会による点検・評価		
		所見	執行部による点検・評価内容に異議なし。	
			改善のための提言	—
No	評価基準	社会連携・社会貢献		
26	中期目標	学部長期構想に記された通り、「社会に開かれた学部」として社会貢献・社会連携をすすめ、学部の社会的責任（FSR）を果たす。		
	年度目標	②複数の地域・団体と協定（包括連携協定（総長名））や覚書（学部長名）を締結し、フィールドスタディやキャリアチャレンジなどの社会連携科目を通じた外部連携を強化する。また既存の協定についても必要に応じて見直しやさらなる発展を図る。		
	達成指標	②協定及び覚書の締結数。社会連携科目数。社会連携科目への応募学生数／参加学生数		
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価		
		自己評価	A	
		理由	・キャリアチャレンジにかかる協定の新規締結（1 件 Hawai'I Innovative Knowledge Institute）	
		改善策	—	
		質保証委員会による点検・評価		
		所見	執行部による点検・評価内容に異議なし。	
			改善のための提言	—
No	評価基準	社会連携・社会貢献		
27	中期目標	学部長期構想に記された通り、「社会に開かれた学部」として社会貢献・社会連携をすすめ、学部の社会的責任（FSR）を果たす。		
	年度目標	③千代田区との協定に基づく研究会（CES ゼミナール）の後継科目設置とあわせ、EMS の教育への活用、持続可能な都市に関する事業展開を図る。		
	達成指標	③CES ゼミナールの後継科目設置。持続可能な都市等に関する事業の企画立案と実施		
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価		
		自己評価	A	
		理由	・CES ゼミの継続開講を決定。	
		改善策	—	
		質保証委員会による点検・評価		
		所見	執行部による点検・評価内容に異議なし。	
			改善のための提言	—

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

No	評価基準	社会連携・社会貢献	
28	中期目標	学部長期構想に記された通り、「社会に開かれた学部」として社会貢献・社会連携をすすめ、学部の社会的責任（FSR）を果たす。	
	年度目標	④社会連携科目の受け入れ地域や提携先に対する研究等を通じた社会貢献や、ネットワーク化など特色のあるFSRを推進する。	
	達成指標	④社会連携・社会貢献にかかわる研究など企画実績。その他社会貢献イベントの実施数／参加者数	
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	A
		理由	・新潟県上越市や長野県飯田市との連携などを通じて模索中である。 ・地域貢献や社会課題解決に努める学部卒業生による特別講演を実施し、人的リソースのネットワーク化をすすめている。
		改善策	－
質保証委員会による点検・評価			
所見		執行部による点検・評価内容に異議なし。	
改善のための提言	－		
No	評価基準	社会連携・社会貢献	
29	中期目標	学部長期構想に記された通り、「社会に開かれた学部」として社会貢献・社会連携をすすめ、学部の社会的責任（FSR）を果たす。	
	年度目標	⑤教育・研究活動の成果を、主に出版活動などを通じて社会に還元する。	
	達成指標	⑤出版実績。シンポジウム等実績	
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	A
		理由	・人間環境学特別セミナー（「トニカン」）開催 ・学部開設20周年シンポジウム開催
		改善策	－
質保証委員会による点検・評価			
所見		執行部による点検・評価内容に異議なし。	
改善のための提言	－		
【重点目標】			
1. 教育課程・学習成果【教育課程・教育内容に関する事】 ①：将来構想推進委員会、カリキュラム基本制度委員会等各種委員会活動を通じて教員間の共通理解を醸成する（FD活動）と共に、具体的なカリキュラム体系と3つのポリシーとの関係を一層整備することを通じて対応する。			
2. 教育課程・学習成果【学習成果に関する事】 ①：学部執行部／FD推進チームを中心とし、多数の教員の参加を得つつ検討を進めることを通じて対応する。			
3. 社会貢献・社会連携 ①：学部執行部／20周年事業実施委員会を中心として、多数の教員の参加を得つつ検討を進める。また学部卒業生など外部資源／ネットワークも活用し学部の一体感を醸成しつつ企画立案／実施をすすめる。			
【年度目標達成状況総括】			
上記重点目標のうち、「3. 社会貢献・社会連携」については2018年度単年度の目標としては十分に達成できた（20周年記念シンポジウムの開催や卒業生の特別講演開催など）。一方で、「1. 【教育課程・教育内容に関する事】」と「2. 【学習成果に関する事】」については、学部内委員会等での議論に着手しているが引き続き検討が必要であり、2019年度以降も重点的に対応が必要と考えている。			
【2018年度目標の達成状況に関する大学評価】			
人間環境学部では、学部長期構想「人間環境学部2030」による理念・目的におけるコアミッションに基づき明確な方向性が示されており、内部質保証、教育研究活動、社会連携・社会貢献など、年度目標をほぼ達成し、質の向上がみられる。			

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

教育課程・学習成果における「教育課程・教育内容に関すること」「学習成果に関すること」については、引き続き検討が必要であるとのことで、その対応に期待したい。

IV 2019 年度中期目標・年度目標

No	評価基準	理念・目的
1	中期目標	学部長期構想に記載した理念・目的を確認する。
	年度目標	学部ホームページに掲載された理念・目的の修正の要の有無を検討する。
	達成指標	教授会議事録、学部 HP
No	評価基準	内部質保証
2	中期目標	適正な PDCA サイクルの運営を継続する。
	年度目標	PDCA サイクル運営の C (チェック) に重点を置き、執行部や学部事務局への過負荷要因を調査し、組織的に無理のない業務分担のあり方を考えて試行する。
	達成指標	今年度の「拡大 (合同)」委員会開催記録、次年度各種委員会分担案 (表)
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育課程・教育内容に関すること】
3	中期目標	学部長期構想に記されたコアミッションに基づき、持続可能な社会の構築に貢献するための教育を実践する。また、同じく長期構想にて再定義された教育におけるミッションを踏まえ教育内容のさらなる改善をすすめる。
	年度目標	①SDGs とカリキュラムとの結びつきをより進める、ESD 教育に関わる各種のとりくみを行う。 ②グローバル教育推進に関して、カリキュラムの「グローバルツリー」作成に着手する。 ③社会人 RSP を軌道に乗せる。
	達成指標	①シラバスにおける SDGs へのリンクについて言及した科目の増加、広報・社会貢献・総合学習等を兼ねた企画に向けた検討 (委員会における企画の記録) ②関連する委員会の作業記録 ③RSP についての学部 HP (新規作成)
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育方法に関すること】
4	中期目標	持続可能な社会の構築に向けた「実践知」の修得のため、多様な主体と協働しつつ、主体性をもって学ぶ姿勢を強化する教育を推進する。
	年度目標	①学部の理念である「社会連携」を実践するアクティブラーニング、PBL 型科目 [フィールドスタディ、キャリアチャレンジ、研究会等) を引き続き維持し、充実につとめる。 ②多様な入学経路が全体の活力につながることを念頭に、人間環境倶楽部の活用を含む、一層の交流環境づくりに努める。 ③「人間環境学への招待」の運営・授業に多くの教員が参画し、毎回 2~3 名の教員がコラボ講義を行うなど、多様な専門領域をもつ教員同士の学際的な「協働」を実践するとともに、FD 効果を高める場として活用する。
	達成指標	①アクティブラーニング、PBL 型科目の数の確認 ②関連する企画の記録 (またはイベント等開催記録)、教授会議事録 ③2019 年度「人間環境学への招待」教員担当記録
No	評価基準	教育課程・学習成果【学習成果に関すること】
5	中期目標	文理融合でありかつ特定分野の枠に収まらない教育課程に対し、いかなる学習成果の把握、可視化の手法があるのか、グッドプラクティスを積み上げつつ体系化を目指す。
	年度目標	左記「グッドプラクティス」の発掘等を継続するとともに、4 年次におけるアンケートなどを含む成果指標の検討に着手する。
	達成指標	関連する委員会の審議記録、教授会議事録
No	評価基準	学生の受け入れ
6	中期目標	2016 年度に策定した入試戦略に基づき、18 歳人口の減少を迎える 2018 年以降の社会環境において、定員超過に留意しつつ定員の充足に努める。
	年度目標	①一般入試では、志願者の動向、入学者の成績などの要素を勘案した、高校ターゲット層の選定と効果的な入試広報を実施する。

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S: さらに改善した、A: 従来通り、B: 改善していない」を意味する。

		②多様な入学経路を本学部の特色として大切にし、特に少数枠の SCOPE や RSP について志願者の安定的確保につとめる。
	達成指標	①広報広聴委員会活動記録、関連する教授会議事録、2020 年入試結果 ②学部 HP における広報の充実、関連運営委員会の広報活動記録、2020 年入試結果
No	評価基準	教員・教員組織
7	中期目標	学部長期構想および人事戦略に基づき、適切な教員組織の維持を図る。また、持続的な FD 活動を実施し、イノベーションの基盤の整備に努める。
	年度目標	①自己点検項目に沿った、個々の委員会のミッション・位置がわかりやすい学部内の各種委員会分担表を作成する。 ②SCOPE 任期付教員で必要な補充人事の準備を進め、2020 年末で退職する専任教員の補充人事の検討に着手する。
	達成指標	①「内部質保証」に同じ ②人事委員会議事メモ
No	評価基準	学生支援
8	中期目標	多様な学生のニーズを念頭におき、学習支援、生活支援を組織的に実施する。
	年度目標	少数枠である社会人 RSP 学生や SCOPE 生の学習支援、生活支援を一層進めることを含め、学部によるケアのみならず、学習環境支援センターの各種サポート等も利活用した学生支援を推進する。
	達成指標	ラーニングサポーター制度の利用記録 など
No	評価基準	社会連携・社会貢献
9	中期目標	学部長期構想に記された通り、「社会に開かれた学部」として社会貢献・社会連携をすすめ、学部の社会的責任 (FSR) を果たす。
	年度目標	①SDGs をテーマとしたイベント等の企画検討などを進める。 ②フィールドスタディ等で連携協定のある地域・自治体との関係を、一部見直しも含めて継続する。
	達成指標	①「教育課程・教育内容に関すること」に同じ ②FS、キャリアチャレンジ企画書 (募集要項)
<p>【重点目標】</p> <p>本学部が 2010 年代に積極的に進めてきたカリキュラム改革・新規の事業をふまえ、近未来を見据えて 2017 年 3 月に策定された学部長期構想「人間環境学部 2030」に記された 9 目のリーディングプロジェクトの中で、執行部や学部事務局に過負担がかからない業務分担の見直しに取り組みつつ、プロジェクトに優先順位をつける。そのうえで、無理のない範囲で、学部の特長を伸ばし、かつ広報にも有効で、FD 活動の意味も持つ企画を試みる。纏めれば、「学部長期構想に基づいたとりくみの安定化」が目標となる。</p>		

【2019 年度中期・年度目標に関する大学評価】

人間環境学部では、学部長期構想「人間環境学部 2030」で理念・目的について明確な方向性が示されており、中期目標・年度目標ともにそれに準拠する形で設定されており、適切である。2018 年度は、大枠で学部長期構想に基づいた取り組みの安定化を重点目標としているが、新たな取り組みとして 2019 年度開設事業である社会人 RSP (リフレッシュステージプログラム) の準備など SCOPE を含め、多様な学生の確保、ニーズへの対応を年度目標として組み入れていることは高く評価できる。

【法令要件及びその他基礎的要件等の遵守状況】

特になし

【大学評価総評】

人間環境学部は、大学の 3 つのミッションであるうちの 1 つ「持続可能な地球社会の構築」を先導すべき使命を帯びているという自覚から目指すべき方向性を打ち出し、学部長期構想の策定によって理念・目的を明確にしておき、学部の発展が大いに期待される。

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S: さらに改善した、A: 従来通り、B: 改善していない」を意味する。

質保証、教育課程・学習成果、学生の受け入れ、教員・教員組織、学習支援、社会連携・社会貢献に関する各項目は総じて良好であり適切に運営されている。特に学習支援、学生の受け入れに関しては、少人数制の社会人 RSP（リフレッシュステージプログラム）の開設など英語学位プログラム（SCOPE）を含め、多様な学生の確保、ニーズへの対応を組織的に組み入れていることは高く評価できる。

今後は、学習成果の把握・可視化に関する指標の開発の検討を継続するとともに、学習支援体制の充実や新たな外部団体・組織との連携の締結などを推し進め、特定の分野に収まらない文理融合の学部教育を追求、整備されることを期待する。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。